

留萌の研究活動

研究部長 小平町立小平小学校
校長 齊藤友昭

1 はじめに

研究主題を「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小中学校教育の推進」とした4ヵ年継続研究の3年目となる。各市町村の研究を基盤とし、南北ブロック体制のもと年に一度の管内研究協議会における提言と研究協議、更に全道小・全日中・全道中提言のためのプロジェクト委員会の組織化、全連小研究大会参加などを通じて、学校経営の在り方や教育現場の今後の進む方向性などを校長の果たすべき役割を視点にすえて意欲的に研鑽に励み、課題を究明している。



2 研究計画

(1) 活動方針

研究主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小中学校教育の推進」、副主題「北の大地から世界を見つめ 新しい社会の形成に向けて挑戦する子どもを育む学校経営の推進」に基づく研究活動の充実を図り、校長としての識見を高め、指導力の向上に努める。

(2) 研究推進の重点

① 本年度の研究協議会は、研究基本主題に基づく4ヵ年計画の3年次目の研究を推進し、第6回留萌管内小中学校長会教育研究協議会において共通理解を深めるとともに、昨年度明らかになった課題解決に向けた具体的な論議の場となるように努める。

研究推進については、提言担当地区を中心にしながらも、南北ブロック共同研究体制を基盤として研修活動を充実させ、その成果を管内研へと積み上げていく。

② 今年度の全道小研提言と全日中提言、平成27年度全道中提言に向けて提言プロジェクト委員会の活動を充実し、研究推進に努める。

③ 研究集録「和心一統」第45号を発刊し、研究の成果と校長会の足跡を記録に残す。

④ 道小・道中研究部、各市町村研究部及び関係機関との連携の強化に努める。

⑤ 留萌管内研究団体連絡協議会の会長・事務局長として、各研究会の連絡調整をする。

3 研究活動

(1) 4ヵ年継続研究計画

研究主題・副主題は、平成24年度から始まり今年度は4ヵ年継続研究の3年次目となる。研究分野は学校経営の中核をなす「教育課程」と「生徒指導」としている。

○前半2年間は、学習指導要領本格実施を考慮し「教育課程」、後半2年間は「教育課程」と「生徒指導」とする。

○校長の在り方として「校長の役割行動」を参考にしながら問題解決の方策や戦略的な方策の具体化を目指す。

○研究提言は、南北ブロック・4グループ制による輪番とする。

(2) 第62回留萌管内小中学校長会教育研究協議会の開催

- ① 期日 平成26年8月6日(水)
- ② 会場 小平町文化交流センター
- ③ 研究主題及び視点

■「教育課程」分科会研究主題

「生きる力」を育む教育課程の編成と指導の組織化

○研究の視点

- ・「確かな学力」を育む教育課程の編成と指導の組織化
- ・個性を尊重し、「豊かな心」「健やかな体」をはぐくむ教育課程の編成

■「生徒指導」分科会研究主題

豊かな人間関係をはぐくむ生徒指導と校長の在り方

○研究の視点

- ・児童生徒理解を深め、かかわり合う力の育成を目指す生徒指導の推進
- ・家庭、地域社会、関係機関等と連携した生徒指導の推進と校長の在り方

④ 分科会概要

教育課程分科会、生徒指導分科会に分かれ、提言者の提言をもとに教育課程と生徒指導の課題解決や今後の取組について研究協議を行った。

○「教育課程」分科会

- ・提言者 増毛町立別荘小学校長 堀井理

○「生徒指導」分科会

- ・提言者 羽幌町立天売小中学校長 早坂康

(3) 平成26年度 全道小日高大会の提言

○第9分会「健全育成」

○研究発表 「いじめや不登校等を生まない意図的・計画的な学校づくり・組織作り」

○提言者 増毛町立阿分小学校長 石田正樹

(4) プロジェクト委員会

平成27年度全道中檜山江差大会の提言のためにプロジェクト委員会を組織して準備を進めている。

(5) 新任校長会への参加

管内校長会で実施した「新任校長研修会」には、研究部として、校長会の活動の中核をなす研修・研究活動の重要性や組織体制について説明し、校長会の連携や校長としてどのように学校経営に当たるかを新任校長と共に考えさせていただいた。

(6) 各種研究会への参加、還流

研究会参加報告は研究集録「和心一統」に掲載して還流を図っている。

○全道小教育研究大会日高大会 小学校長9名参加

○全日中苫小牧大会 中学校長8名参加

○全連小研究協議会埼玉大会 小学校長3名参加

4 おわりに

管内校長会の研究計画の3年次目を終えることができた。次年度は、研究計画最後の年となるのでまとめと次期の研究計画の策定作業に取りかかる。少人数の校長会としては、一人一人に様々な役割が偏り無く全員にあたっている。これまでは、何とかこなしてきたが、今後も少子化による学校の統廃合が進むことを考えると身の丈に合った活動に絞り込んでいく必要を感じている。全道小や全道中の研究についてもこれから、留萌の実態に合った活動にしていくように要望していくこともやむを得ない状況になってきていると考える。